

谷 研  
こだま

私にとって国民学校とは

熊杉 至  
*Itaru Kumasugi*

# 『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

## 操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

## 読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

谷 研  
ごだま

私にとって国民学校とは

熊杉 至  
*Itaru Kumasugi*

文芸社

亡き父母に捧ぐ



1979年9月中旬撮影

1985年6月 父没

1993年1月 母没

(撮影は筆者)

## 研／目次

はじめに 7

一 国民学校 15

二 おなら 49

三 地球の環境 59

四 人類の生存環境 91

### 付録資料

【資料一】 国民学校令 107

【資料二】 国民学校令施行規則 117

【資料三】 満州並びに關東州に於ける国民学校規則の相違対照表 143

【資料四】 国民学校教科書に対する陸軍要望事項 181

【資料五】 あたらしい憲法のはなし 199

おわりに 255

参考文献・資料 291



谷<sup>こたまま</sup>

私にとって国民学校とは



## はじめに

どういふ理由か、ほとんど世間に知られていない事柄の一つに、「日本の教育史」上（と言つても一八七二年（明治五年）、小学校制度が出来た以降のことだが）、「小学校」とは全く縁が無かつた特異の学年が一学年だけ存在するという事実がある。それは、日中戦争の戦時中、「小学校」が廃止され「国民学校」に制度が変更した年、すなわち、一九四一年（昭和十六年）に入学した学年が、その例外の学年である。

「国民学校」が存在したことは広く知られており、『百科事典』、『教育学事典』等には、「国民学校」の項目があつて説明文があり、六年間続いたことも書かれている。

ならば、当然、「小学校」とは無縁であつた学年が一学年だけ存在することは判りそうなものだが、その記述はない。誠に不思議である。

「国民学校」が敗戦で実質的には使命を終えたことに、目が奪われてしまったからなのだろうか。

「国民学校」は、その前後の「小学校」と比べると、かなり異質な教育制度であつ

た。

「国民学校」が「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ以テ目的トス」（国民学校令第一条）なのに対し、一八九〇年（明治二十三年）『教育ニ関スル勅語』（発布）の『小学校令』（一八八六年）明治十九年に制定、一八九〇年に改定）では、「小学校ハ児童身体ノ発達ニ留意シテ道德教育及ビ国民教育ノ基礎並ビ其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス」（第一条）であり、また、一九四七年（昭和二十二年）の『学校教育法』では、「小学校は、心身の発達に應じて、初等普通教育を施すことを目的とする」（第十七条）である。いかに、「国民学校」が狂信的（？）な異質の制度であったか、明瞭であろう。

「教科書は、教育史の原資料として重要なものである。各時期の教科書について、その編纂理念を見れば、当時の人々の教育観や価値観が凝集されているのを知ることができるとであろう。早い話が、各世代が小学校一年生の教科書を通読すれば、当時の自分がどのような人間になるべく期待されていたかが、おそろしいほど明瞭にわかるはずである。戦前、戦中の世代にとつて、この問題は深刻であり、単なるノスタルジーをもって古い教科書に接することを許さぬものがあるといえよう」（紀田順一郎『図書館が面白い』ちくま文庫、一九九四年）

この「小学校」と全く無縁の学年は、その生まれた年月からして、私は「昭和のヒトケタとフタケタの混合」と密かに称している。そして、私はその学年に属する〔国民学校〕に制度替えした年に入学した人達の生年についてふれた資料はほとんど無い。たまたま一資料だけ書かれたものが目についたが、ご丁寧にも、「昭和十年生まれと十一年早生まれ」と間違つて書かれていたのは、ただけない。

私が生まれたのは、一九三五年（昭和十年）三月三十日、東京府豊島区（東京都になったのは一九四三年（昭和十八年）七月一日）である。生まれて来るのが三日遅れていたなら、または、親が気を利かして、三日以上遅れたことにして、出生届けを出していたら、私はこの「特異の学年」から外れてしまう。余談になるが、私がこの世に生まれ出て来て、最初に戴いた大きなプレゼントは、親が付けてくれた名前である。「徹」と名付けられた。親がどんな願いをこめて付けたのか、何も聞いてないので知らないが、私なりに無い知恵をしぼって、「何か一つのこと徹してごらん」という意味ではないかと判断したのは、十代の半ば頃のことである。私はその時、一瞬、親は私が生まれた時、すでに私の性格を見抜いて付けたのではないかと錯覚したほど、私の性格に実によくマッチした名前である。以上、「特異の学年」と「名前」の二つの点で、私は親に感謝している。

私が「特異の学年」に属することを知ったのは、一九六〇年代の半ば頃である。その時から、私は自分が納得出来るまで、「私（達）」にとつて『国民学校』とは何であったのか」ということの追究に徹してみようと心に決めた。

私が受けた「国民学校」教育は、日本の内地ではない。「傀儡<sup>かいらい</sup>国家」とか、「植民地国家」とか呼ばれていた旧「満州国」（正しくは満洲国）現在の中華人民共和国東北地方）である。言わば支流の人間である。

何となれば、『国民学校令』（付録・資料編参照）は日本内地に適用されたものであって、旧満州国には適用されていない。旧満州国でも「国民学校」に制度が変わっているが、『国民学校令』、『国民学校令施行規則』とは非常によく似たもので、『在満国民学校規則』（付録・資料編参照）である。そして、敗戦により満州国家が崩壊したから、それまでのあらゆる制度も崩壊することになる。私が入学した「公主嶺在満国民学校」は、敗戦後三ヶ月ほどして再開され、「公主嶺日本人学校」と改称されている。

入学した「公主嶺在満国民学校」はまずまずの中規模の学校であったが、間もなく、全校生徒（一年生から六年生まで合わせて）が数十人の小規模（教師三人の複式学級）の学校に転校し、おまけに途中で一年遅れてしまい（その理由は「おわりに」で）、特異の学年から外れてしまった。言ってみれば、私は「支流の支流の落第生」

である。

「支流の支流」と書いたのは、敗戦時の五年生の時に次のようなことがあったからだ。私は、前郭旗（吉林省）という小さな街に住んで居た。学校での「体錬」の時間であった。男子生徒七人（これでも七人に増えたのである。私が前郭旗に転校した時、私の学年は女子ばかり十余人で、男は私のみであった。三年生の時の約一年間は「黒一点」の状態が続いたのである）が、木刀を持たされ上段の構えをさせられた。「背後から木刀をたたくから、しっかり握っておれよ」と教師は言って、背後に廻った。身体も小さく、力も無く、運動神経もふい私は、それまでの経緯からして、試されないと勝手に独断し、油断して軽く木刀を握っていた。そんなところへ教師が試したから、木刀は私の手を離れてしまった。なんとも不様なことをしてしまった。私は、咄嗟に歯をくいしばり、身構えた。

しかし、教師は私を殴ったり、足蹴にしたり、罵倒したりもしない。それどころか、叱責の言葉さえも一言もない無言の行であった。

極めて善意な解釈をすれば、教師は日本の敗戦を直感的に感じ取っていたのかも知れない。ちなみに、体錬の教師は借り物で、本職は「神主」という代用教員であった（国民学校の特徴の一つに、代用教員が多いということがあった）。

戦時中の教育を知っている人々には、前述のことはとても信じてもらえないことで

あろう。「小さな学校の大きなメリット」と言ったら、奇異に思われ笑われてしまうであろうか。

各地の学校には、どうしても許せない教師がいたはずである。実際、私が入学した「公主嶺在満国民学校」でも、同級生の間から、某先生だけは「絶対に許せない。生きていたら殴り殺したい」というぶっそうな発言が、複数の人から出ているのである。もつとも、公主嶺は軍事拠点都市で、関東軍が駐屯し、陸軍の飛行場、陸軍病院等もあつたからであろう。

話は横道にされるが、公主嶺の飛行場から「特攻隊」が出撃していたようだ。公主嶺の同級生M君の証言である。律儀な男であるから信用していいだろう。彼は、間接的に譲られた恩賜の煙草たばこを大事に保存している（公主嶺については、公主嶺小学校同窓会が創立八十周年記念として、一九八七年秋に記念誌を刊行した。学校の記念誌としては、ほとんど類例のない郷土誌である。「日本人社会の」という限定されたものではあるが、中国側が高く評価し、中国語訳版が出版されたことを、『朝日新聞』（東京本社版、一九九一年八月十七日夕刊）が報じてくれた）。

だから私は、本流である内地で「国民学校」の教育を受けた特異の学年を体験した人達の中で、「国民学校」にこだわる人を探し求め、その人達を中心にした「国民学校研究会」のようなものをつくらうと思っていた。そして、私は、縁の下の力持ちの

ような役割を果そうとのんびりと構えながら、「国民学校」の調べをぼつりぼつりと始めていた。

そんなところへ、「児童読み物作家」の山中恒氏が、『ボクラ少国民』シリーズを刊行し始めた。その中の『御民ワレ』（『ボクラ少国民』第二部）を読んで、私は眼の前が霞んでしまい、私の思いがガタガタと音をたててくずれてしまった。先を越されてしまったのである。それも、私が考えていたことよりも、はるかに先を越えて詳細に克明に書かれていた。

山中恒氏は、特異の学年の私達より「三学年上」の人である。私は、「特異の学年である私達の中から、『国民学校』のことにこだわる人が誰も出てこないのは、どうみてもおかしい。否、情けない」と強く思った。

私は、「『支流の支流の落第生』と言って逃けているわけにはいかない。気が付いた人がやるしかない」と思い直した。そして、落第生であればこそ好き勝手な架空の同期会にすれば、何とか書けそうだと思いついた。でも、その思いに至るまで一年位は経過しただろうか。しかし、その時点で、頭の中での構想は七割方は出来上っていた。

ここに綴った駄文は、特異の学年が中学校を卒業（一九五〇年三月）後、三十五年後の一九八五年に開いた第十一回の同級会の形式を取ったもので、全くのフィクション

ンである。よって、モデルとなる同級会は存在しない。念のため。

「関東軍の敗北、満州国の崩壊、このあとに来たものは、無法と無秩序の大暴風だった。二百万人にのぼった満州の日本人は、木の葉のごとくこの大暴風にまき込まれて、家や財産や生命を失った。そういえば、内地だって空襲で家を焼かれ、財産を失い、命を落した人はたくさんいる。しかし、戦争の直接被害をうけなかった人もかなりいる。だが、外地、特に満州にいた日本人は、一人残らず、まさに一人の例外もなく、その三つのうちのいずれかを、いや多くの人たちは、その全部を失ったのである。それも、言語に絶するはずかしめをうけたうえに失ったのである。ほんとうの意味の敗戦の悲惨さをなめつくしたのであった」〔昭和史の天皇 第五巻〕読売新聞社、一九六八年〕

私は、一九四六年（昭和二十一年）七月末に帰国したが、戦時中の数少ない生き残りの客船「雲仙丸」に乗れたのは幸いであった。李香蘭こと山口淑子（大鷹淑子）さんも、私達より四ヶ月ほど早く、同じ「雲仙丸」で中国大陸より帰国している（『李香蘭 私の半生』新潮社、一九八七年）。

## 一 国民学校

「予定開始時刻を二十分近く過ぎました。まだ、出席予定者が数名見えておりませんが、二十名を超えた人達が集まっておりますので、只今から、第十一回目の同級会を始めたと思います」

と、今回の世話人の丸井勝好君が切り出した。

ここは都心の某ホテルの一室で、首都圏の〇町〇中学校を、一九五〇年（昭和二十年）三月に卒業した人達の同級会である。時は、一九八五年（昭和六十年）晩秋のとある土曜日の夕方である。

「前回までは、きちんと三年毎に開かれて来ましたが、今回、二年も遅れ五年振りの会合になってしまいましたのは、秋場靖先生が長年の教師生活に終止符を打たれ、『海外旅行』を三ヶ月ほどなさった後、首都圏を離れて四国の山村Y町に移られて自給自足の生活に入られたことなどで、同級会の開催が遅れてしまいました。この五年間に、三人の方が亡くなってしまいました。高梨満君が肺ガンで、久我久雄君と片岡

サヨさんが自殺されました。久我君の場合は、胃ガンが手遅れだったことに原因があるようにで」

「道路が曲がっているのさえ嫌って、道路を直線的に歩き、周囲をハラハラさせた、あの曲がったことの嫌いな、真つ直ぐな男が胃ガンですか」

誰かが言ったので、半数位の人が笑った。

「皆さんは知らないだろうが、久我君は極端な医者嫌いで、医者にかかった時は、すでに手遅れだったんです。胃ガンに冒されていたことを、奥さんも職場の人も、全く知らなかった。幼馴染の僕も、もちろん、知らなかった。痛みをギリギリまで、堪えに堪えていたようだ。忍耐強い男だったからね。彼は二十歳代半ば頃のある時、『胃ガンにかかったら、あっさりこの世を去るよ』と、僕にもらしたことがありましたね。だから、彼は直感的に、本能的に胃ガンにかかったことを知っていたのじゃないかね」

しんみりとした口調で、野宮規正君が語った。

「会の進行をどのように進めましょうか。最初に秋場先生から、『海外旅行』のことや、山村生活に移られた動機などを伺うことから始めましょうか。先生、口火をきっていただけませんか」

「僕はゲストでしょう。皆さんの会だから、皆さんの方から話題や問題提起のような

ものを出し合って進めた方がよいのではないでしょうか。僕は、後で時間があつたら、少し話をしましょう」

「それでは、卒業後三十五年経ていますが、戦後四十年の今年、どなたからでも、何か話題を出していただけませんか」

しばらく沈黙が続いた後、

「それでは、僕から、問題提起のようなものを、少し出してみましよう」

五味英成君がしゃべり始めた。

「僕達が、初めて学校に入ったのは、一九四一年（昭和十六年）で、いわゆる『大東亜戦争』の始まった年です。そして、敗戦の一九四五年（昭和二十年）、僕達は……」

五味君が、一語一語言葉を選びながら、ゆっくりとした語り口で切り出した。

「そう、『小学校の五年生』だったわ」

横から、三枝恵子さんが口をはさみ、二、三の人々が同様の発言をした。

「『小学校の五年生』か」

五味君が、小さくつぶやき、この後の話をどのように続けようかと、とまどい、間があった。

「僕が、五味君の切り出した話の後を続けましょう」

言い出したのは、クラスでもおとなしく、口数も少なく、そして、会ではいつも隅っこに座っていて、いるのかいないのか判らないような男、粕田裕君である。

「『小学校五年生』と言った人達の揚げ足を取って非難するつもりはありませんが、この表現は間違いです」

「そんな馬鹿な、終戦の時は『小学校五年生』だったことは確かよ」

少しむきになって、三枝さんが口応えした。

「横から口をはさむのを少しつつしんで、五味、粕田両君が提供する話の内容が判るまでじっくり聞きましょう」

司会役の丸井君が、中に割って入った。

「『五年生』には間違いはないんだよ」

粕田君が話を続け出すと、皆は狐につままれたように、怪訝な顔をした。

「五味君が『初めて学校に入ったのは……』と、切り出した表現に注意を払っていただきたいのです。『小学校』と言うから間違いだと言うのです。揚げ足取りのようですね。恐縮だが、僕達が入学したのは、『小学校』ではありません。」

「国民学校五年生」と言ってくれば、五味君は、素直にそのまま話を続けたと思うよ。

僕達が初めて学校に入った一九四一年に、『小学校』（正確には『尋常高等小学校』）から『国民学校』へと、教育制度が変更されています。だから、敗戦時は、『国民学校五年生』と、言わなければなりません。『小学校』でも、『国民学校』でも、どっちでもいいのではないかと、言われるかも知れませんが、その発言はしてほしくはないですね。戦争に負けて、教育制度が変更し、『小学校』制度に再び戻りますが、この変更が、一九四七年（昭和二十二年）。この間、ちょうど六年間です。すなわち、『国民学校』に入って、『国民学校』を卒業した学年が一学年だけ存在するということです。そして、僕達はその学年です。

僕達の前の学年は、『小学校』に入って、『国民学校』を卒業。僕達の後の学年は、『国民学校』に入って、『小学校』を卒業です。

一八七二年（明治五年）に『小学校』制度が出来て以来、『小学校』に全く無縁だったのは、僕等の学年だけ、すなわち、一九四一年に入学した人達だけが、唯一、例外の学年です。この事実注目していただきたいのです。

『国民学校』を卒業して、中学校に入るのですが、これが『新制中学』と呼ばれ、僕等が初年度です。すなわち、『国民学校』、『新制中学』と、いずれも初年度に入学しているのです。そして、この『新制中学』が義務教育で、僕等の学年から義務教育が『六年』から『九年』間になり、三年延びているのです。この『九年』間の義務教育

で、僕達は正反対の教育を、ちょうど半々受けたことになります。戦争に負けて、教科書に墨塗りをしたでしょう。『国民学校』が『皇国民鍊成』を主目的に、編成換えした制度でしたからね」

「いやはや、全く驚いたね。張り手をくらって、軽い脳震盪のうしんどうを起こしたような衝撃だね。話されてみると、粕田君の言う通りだね。お恥ずかしいが、今の今まで、このことに全く気付かずのんびりと日々を暮らして来ていたんだから、穴があつたら入りた  
いね」

と、津川満彦君。

「中位の成績で、これといった特徴、特技や得意課目を持ち合わせていそうにもない、まるつきり目立たない粕田君だけに、極めてシヨッキンゲンな指摘だね。粕田君には、大変失礼な発言だけれど」

これは、柿島昇君。

この他、同じ様な発言が出席者の間から出された。

「五味君がしゃべることを、でしゃばって僕が勝手にしゃべってしまい、悪いことをしてしまつたが、ここで、五味君に補足説明をしていただき、もっと肉付けをしていただきますしょう」

「補足説明することは、ほとんどありません。僕が述べようとした内容は、粕田君が

全部話されました。有難うございました。

しいてつけ加えれば、『国民学校』は、『六年』間の初等科と『二年』間の高等科が置かれ、『高等科』までの『八年』間に義務教育が延びましたけれど、戦争で、『高等科』の義務教育化の実施は延期されています。だから、粕田君の言う通り、僕等が義務教育『九年』間に延びた最初の学年です。

教育制度の変更により、当然、教科書も変わり、いわゆる『サクラ読本』から『アサヒ読本』に変わるわけですが、一九四一年四月に間に合ったのは、一、二年生用だけで、三年生以上は従来の『サクラ読本』を使用したのです。翌年、一九四二年（昭和十七年）四月に三、四年生用、一九四三年（昭和十八年）四月に五、六年生用の教科書が出来て変更されたのです。

ですから、一九四一年四月の『国民学校』が始まった時に二、四年生だった人達は、『サクラ読本』と『アサヒ読本』の両方を習い、五、六年生達は、『アサヒ読本』とは無縁でした。

『国民学校・高等科』の義務教育化は、教科書の関係からと財政の面から、一九四四年（昭和十九年）からの実施のふしを感じられますが、戦局の悪化で延びた（『国民学校令等戦時特例』）のです。

『国民学校』に変更するに際し、軍（陸軍）は強く教育に干渉しています。軍は、

『国民学校教科書に対する陸軍要望事項』（教育総監部）〔付録・資料編〕参照〕なるものを発表しているし、また、軍は文部省に人を派遣して、お目付役をさせています。

『国民学校令』（勅令一四八号）第一条は、『国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス』です。

国民学校の教科は、

国民科Ⅱ修身、国語、国史、地理

理科Ⅱ算数、理科

体錬科Ⅱ体操、武道

芸能科Ⅱ音楽、習字、図画及び工作、裁縫

実業科Ⅱ農業、工業、商業、水産

の五教科ですが、実業科は高等科のみです。

粕田君が述べた通り、戦争に負けて、教科書に墨を塗ることになるのですが、『世界の教科書』の中で、教科書に墨を塗った事例が他にあるでしょうか。

教科書に墨を塗った他に、教科書が停止されたこともあります。それは、『国民科』の中で『国語』を除く、『修身、国史、地理』の三教科が一九四六年（昭和二十一年）一月より停止されています。これは、断るまでもなく、連合国軍総司令部（GHQ）

の命令によるものですが、停止と同時に改訂計画を指示され、地理は同年七月、日本史は十月から授業が再開されています。今、GHQの命令と言いましたが、『覚書』による指示によってとするのが、より適切な表現です。

ところで、戦時中、『外国語』は禁止されたと広く世間に流布されていますが、『禁止令』は今のところ見付かっていません。探しても見つからないでしょう。すなわち、『禁止令』は『無かった』と言うのが私の見方です。

私とその根拠とするのは、『国民学校令』第四条です。第四条の最後に、『前五項ニ揚グル科目ノ他高等科ニ於テハ外国語其ノ他必要ナル科目ヲ設クルコトヲ得』とあります。

なぜ世間に、『外国語』（敵性語）が禁止されたという風潮が出来上がっていったのか、新たな問題が提起されますよね。

教育の面では、『外国語』を教えることを歴として許しておりながら、ほんの少し権力を持った虎の威を借る狐が、通達のようなもので社会に対し『外国語』禁止を徹底させる二枚舌はひどいことですね。

『国民学校令』の中で、もう一つ注意してほしいのは、『体罰』の禁止（第二十条）です。軍部ファシズムに迎合して、無闇矢鱈に生徒にシゴキ、体罰を加えた教師がいたが、ひどいことだね。『生徒に下駄や靴を履くのを禁止して、ハダシで登校させた

学校があつた』と児童読み物作家の山中恒氏は『ボクラ少国民』の中で書いておられるが、全く、非常識が堂々とまかり通つたのだから、何とも残酷だね。

それはともかく、『国民学校』は儀式や学校行事を重視し、宮城遙拝や軍事教練を課したから、この苦しい体験が身にしみているので記憶にあるでしょう。

最後に、『国民学校』はナチス・ドイツの『フォルクスシューレ』(Volksschule)の直訳です。もつとも文部省は、『国民の基礎教育を施す学校という意味で、ドイツ語の『フォルクスシューレ』の翻訳ではない』と言って否定をしていますがね。

『国民学校』が発足する三ヶ月前に、『大日本青少年団』が結成されるが、これは、『ヒットラー・ユーゲント』の模倣です」

「戦時中、『青年学校』があつたと思うが、確か、男子は義務制だったと思う。僕はちやらんぼらんな人間だから、五味、粕田両君のようにきちんと説明出来ないので、補足説明にもなつてないが」

成田章吉君が、一言付け加えた。

「『青年学校』ですか。全然知りませんでした」

五味、粕田両君が同時に発し、互いに顔を見合せて苦笑した。

「もう一言付け加えますと、僕達、一九四一年四月に『国民学校』に入学した人達は、一九三四年の遅生まれと一九三五年の早生まれですね。日本の年号『昭和』で言

うと、『九年』と『十年』です。ですから、少しくだけた表現をすると、『昭和のヒトケタとフタケタの混合』と言えますね。この『混合』、今さっき述べた『小学校』と無縁の学年だったんです」

と、粕田君。

「『昭和のヒトケタとフタケタの混合』ですか。なるほど、ユニークで面白い表現です。これは、全く気が付かなかった」

と、五味君。

「ふーん。『混合』ですか。言い得て妙ですね。なかなか文学的表現ですねなんて言う、かえって、ひやかすと受け取られそうで、不釣合ですね」

と、光山順子さん。

「司会役の丸井君から、冒頭に、二人の自殺者があったことが報告されました。今年（一九八五年）の春だったと思いますが、全国紙のA紙に、『昭和九、十年生まれに、自殺者が多い』という記事が載っていましたね。読まれた方は憶えておられると思いますが、この『昭和九、十年生まれ』が、さつきから問題提起されている特異の学年であることに、研究者達は全く気が付いていないようですね。少なくとも、記事の内容からはそう読み取れません」

研究者達に、『自殺』と『国民学校』との間に何か関係があるのかなのか、その

辺の事情を調べていただきたいですね。そして、この記事を書いた記者にも、この記事のフォロー・アップを頼んでおきたいですね。ちよつと余談になったけれど。

それと、さつき五味君から文部省に軍人が派遣されたと説明がありました。人数は左官クラスの数名です。軍人の書いた文章など、教科書の教材として使いたいのにならず、軍人の書いたものが教科書には一つもないのが、わずかな救いです」

再び、粕田君が付け加えた。

「この辺で、ちよつと口をはさんでもよろしいでしょうか」

と、断りながら、秋場先生が話に加わってきた。

「今日は、もっぱら聞き役にまわって、出来るだけしゃべらないようにと、ひそかに決めて会にのぞんで来たのですが、どうしても、一言、しゃべりたくなつたもので。

とにかく、うれしいね。今迄、今話されたことに早く気が付いてくれないかと、ひそかに待ち望んで来ました。このクラスに二人もいるとは、なんとも、非常にうれしい。

皆も知つての通り、僕は『学徒動員』で戦地に赴き、運悪く生還することが出来ましたが、生きていくために何となく教師になり、使命感のようなものなど何も持ち合わせていないしがない一教師にすぎなかったが、僕にとって最初の卒業生が君達なん

です。それは、ご存じですね。その後、何組もの卒業生を出していますが、君達に、まるで、弟や妹のように一番親しみを感じています。

教師になって始めの内、君達が五味、粕田両君の述べた特異な学年にあるとは、全く知りませんでした。ちょっとしたきっかけから、気が付いたというのか、あるいは、気が付かされたと言った方がいいのか、確か、一九六〇年代の半ば頃だったと思いますが、気が付きました。その時以来、このクラスの中から、早くこの事実気が付いてくれる人が出て来てくれないかと静かに見守って来ました。

今日、このクラスに二人もいることが判って涙が出るほどうれしい。手垢で汚れた陳腐な表現ですが、初めて、『教師冥利につきる』という言葉が使えて、本当にうれしい。

最後に、今迄話を聞いていて、こんな言葉を思い出しました。誰が言ったのか名前を度忘れしてしまいました。『青年期を大正デモクラシーの時代に過ごした人達は、その前後の人達と少し話し合えば、すぐ、区別が出来る』と。

要するに、『国民学校に学んだ学年は、その前後の学年と少し話し合えば区別出来る』と、言い換えることが出来るかどうかという気持ちの隅っこに残っているもので「

「その表現は、確か、人文地理学者の飯塚浩二（一九〇六―一九七〇）さんだったと

思います。あまり自信はありませんが」

と、五味君が応えた。

「そうそう、飯塚浩二さん。五味君、その言葉を知っていたのですか。驚いたなあ。ついで、うっかり、五味君に礼を失する発言をしてしまい申し訳ない。飯塚浩二さんは、まだご生存？」

「どういたしまして。飯塚浩二さんは、すでに亡くなっています。何時いつでしたかね。亡くなられてから、かなり経ちます。確か一九七〇年代の初めだったと思いますが」

「今、述べたように、僕は一九六〇年代の半ば頃に気が付いたのですが、五味君、粕田君は何時いつ頃ですか」

「何時いつ頃だったかなあ。かれこれ、二十年位は経っていると思いますから、先生とほぼ同じ頃になりますね」

と、五味君。

「粕田君は？」

「僕も正確な時期は憶えておりませんが、似たり寄つたりの時期だったように思います」

「すると、三人共ほぼ同じ時期に相前後して、このことに気が付いたことになるんですね。不思議なめぐり合わせだなあ。」

# 途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。  
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

## 著者プロフィール

### 熊杉 至 (くまさぎ いたる)

本名、有川 徹 (ありかわ とおる)  
1935年、東京生まれ。  
1937年から1946年まで旧満州国滞在。  
1960年に私立大学卒業。  
1968年から1982年まで都市銀行勤務。  
現在、長崎県在住。

こだま

## 研 私にとって国民学校とは

---

2006年 6月15日 電子出版発行

著 者 熊杉 至

発 行 者 瓜谷 綱延

発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Itaru Kumasugi 2006 Corded in Japan

ISBN4-286-01337-5

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」  
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。)

新 06.05.25 CAPS